

2014年度長野県高校総体登山大会事前研究資料

蝶ヶ岳 ●ちょうがたけ ●標高2664m

南安曇郡堀金村と安曇村の境の山。常念岳の南、常念山脈のほぼ中ほどに位置する。常念岳の男性的な姿とは対照的に、名のような女性的な山容を示す。

蝶ヶ岳はすでに江戸中期の正保の国絵図に載っており、山名も文字も変わっていない（『南安曇郡誌』下巻）。4月中旬から6月中旬にかけて、安曇野市の旧豊科町・旧穂高町方面から見ると、山荘より約600m南の山稜付近のお花畑の残雪が羽根をいっぱい広げて空を飛ぶチョウの形に浮き出て見えることから名づけられたといわれている。田淵行男の『山の紋章・雪形』によると、このチョウの雪形は約250mの大きさを持ち、ガの中の美形種で淡青色のオオミズアオに似ているという。しかし、チョウは好きだがガは嫌いだという人が多いことから、オオミズアオになぞらえることにいささか抵抗をおぼえる彼は、次に似ているものとして高山チョウの一種のミヤマモンキチョウを挙げている。

また堀金村（現安曇野市堀金）の古老の話によると、チョウの胴体にあたる部分の尾根雪が消えると“チョウが舞う”とか“チョウの背が割れた”といって苗代の種まきをしたものだという。白馬岳の「代かき馬」と同様、農事暦の指針として雪国の人々に伝えられ根づいたものであろう。

古生層（中生層という説もある）の粘板岩や礫岩、チャートから成るこの山には、常念岳には見られない氷河周辺地形としての二重山稜が発達している。常念岳からの縦走路の最低鞍部から山頂にかけて、数カ所の船窪地形があり、山頂付近には幅50センチくらいの条線砂礫と共に多くの二重山稜が見られる。チョウの雪形も、二重山稜による舟底状のくぼ地が深い雪の吹きだまりとなることができるのだという。縦走路はその中を横切っている。なおチョウの胴体にあたる部分は、中央部のハイマツに覆われた隆起部で、周囲より早く雪が解けるといふ。

この山は1953年、蝶ヶ池の近くにベースキャンプが張られ、続いて1957年、蝶ヶ岳ヒュッテができてから人気が高まり、訪れる人もふえた。それというのも“パノラマ銀座”といわれる常念岳-蝶ヶ岳のコースからは、アルプスの中心である槍・穂高連峰の山容を余すところなく眺めることができ、その上フォッサマグナの谷や山を隔てて、遠くは富士山から八ヶ岳、煙たなびく浅間山まで遠望できるからである。

また、この山は雪のチョウが消えた後は常念山脈中屈指のお花畑になり、高山チョウの多い所になっている。一方、蝶ヶ岳から横尾の谷へ下るコースは、やや急崖ではあるが樹間の道はこけむして、おとぎの国へ通ずるムードをもっている。

蝶ヶ岳への道は5通りある。そのうち、安曇平から山頂を遠望して登る道は、常念岳への道と一部重複している。それは大糸線豊科駅からタクシーで須砂渡を通り、烏川の本沢をつめて三股まで1時間、そこから徒歩で蝶新道を3時間、雄大な穂高連峰の眺めを十分楽しむことができる。

上高地からは、徳沢から長埴山を通り山頂へつめる道（4時間半）と、横尾から直接山頂へ登る道（3時間）がある。このほか常念岳から南へいったん森林限界まで下りて蝶ヶ岳へつめる道（3時間）と、大滝山から蝶へ縦走する道（1時間）がある。

歴史

播隆と案内者小倉村(現安曇野市三郷小倉)の中田又重郎がたどった槍への初めての道は、鍋冠―大滝―蝶―ワサビ沢―槍沢―坊主ノ岩小屋―槍ノ肩で、1826年(文政9年)のことであった。

以来、槍の穂先に鉄鎖をさげた大願成就の1840年(天保11年)まで、播隆は四回ここを通っている。

- * 播隆(ばんりゅう, 1786年(天明6年)～1840年11月14日)は、江戸時代後半の浄土宗の僧。槍ヶ岳の開山、笠ヶ岳の再興者。越中国新川郡河内村(現富山市大山地区)の出身。

地質・地形

秩父古生層の山地である。古生層は黒雲母を含んだ黒色粘板岩と硬砂岩とチャートから成る。地層の走向傾斜は一般に北東―南西走向で、北西傾斜をしめす。頂上部は黒色チャート層が卓越し、小豆大～指頭大の礫をふくむ礫岩層が分布する。礫質は黒色粘板岩、硬砂岩、チャートなどで、沢渡礫岩タイプである。

蝶ヶ岳と大滝山を結ぶ稜線は、主稜線に平行して二重あるいはそれ以上の稜線をもつ二重山稜を形成し、周氷河地形の分布地域となっている。

自然

登山口になっている三股までは、落葉広葉樹がすっかり切り開かれ、跡地がカラマツ植林地となっている。三股から上部も伐開されたままのところが多いが、沢沿いにブナ、ダケカンバ、ミヤマハンノキなどをみることができる。このようなところには、カモシカやニホンザルの群れが生息している。

登山路の両側の低木類(ノリウツギ、クロモジ、ニワトコなど)や草本類を注意してみると、カモシカの食痕を見つけることができる。

標高1600mぐらいになると、シラビソの原生林が続くようになる。夏の間はメボソムシクイやコマドリの声が絶えない。森林内にはノウサギやネズミ類(ヒメネズミやヤチネズミ)が多いので、これらを捕食する肉食獣の痕も少なくない。

尾根筋に近くなるとハイマツ帯が広がるようになるが、東側斜面の残雪の多い部分にはお花畑ができ、シナノキンパイ、ハクサンポウフウ、クルマユリなどが咲き乱れる。また、ミヤマモンキチョウ、クモマベニヒカゲ、ベニヒカゲ、コヒオドシなどの高山チョウもお花畑を飛びかう。

蝶ヶ岳の尾根筋は二重山稜となっていて、くぼ地(舟窪とよばれている)が続き、ハイマツや草本が育ちやすくなっている。ここはカモシカやライチョウのえさ場にもなっている。

長屏山 ●ながかべやま ●標高2564m

南安曇郡安曇村の山。上高地の上流徳沢園から蝶ヶ岳へ登るコースの中程より蝶ヶ岳寄りの所にある。

長屏尾根は常念山脈の中ほどの蝶ヶ岳ヒュッテから南西方向に伸びる大きな尾根で、尾根の中間にある長屏山からその名がつけられている。

ザイル論争をよんだ井上靖の『氷壁』で有名になった徳沢園から水場もない登山路をつめると、標高1500m付近からコマツガなどの針葉樹林が現れ、下草にシクナゲなど見られる。この亜高山帯の中をさらにつめて森林限界に近づくとオオシラビソがぎっしり生えた林になり、やがて倒木帯に出ると林が切れて長屏山の頭上に達する。

山頂からは槍・穂高の連峰の大展望を楽しめる。ここから先はお花畑もある森林となり、所々に池も見られる楽しい登りである。最後はハイマツをぬって蝶ヶ岳―大滝山の縦走路に合流する。このあたりの尾板は広々としていて気分がよく、思わず休みたくなる場所である。

上高地から徳沢園まで二時間。そこから4km、3時間で長屏山に達する。その先は1時間で蝶ヶ岳ヒュッテに至る。

地質・地形

秩父古生層の山地である。古生層は黒色粘板岩が卓越し、硬砂岩とチャートが分布する。一般に走向は北東―南西で、北西に傾斜する構造を示す。下部は粘板岩、上部には硬砂岩が多い。硬砂岩層の中には粘板岩の小片を含んだ礫質の部分もある。

出典 信濃毎日新聞社 「信州山岳百科Ⅰ」昭和58年3月1日発行 より抜粋

*地名等は市町村合併に伴い、現在の名称を追記するなど変更を加えた。